法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-10-24

辺境論考 ： フロンティア、荒野、辺の扱い

井坂, 義雄 / Isaka, Yoshio

(出版者 / Publisher)
法政大学国際文化学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
異文化. 論文編 / 異文化. 論文編
(巻 / Volume)
6
(開始ページ / Start Page)
7
(終了ページ / End Page)
25
(発行年 / Year)
2005-04-01
(URL)
https://doi.org/10.15002/00002006

Hosei University Repository

辺境論考
——フロンティア、荒野、辺の扱い——
Some Cases of Integrated Ideas: Frontier, Wilderness, and Verge

井坂義雄 •ISAKA Yoshio

(1)

世界の緊張を直接感じ取るのは個であって、どのような媒体を想定したとしても、このことは変わらないだろう。おそらくこれは人の感受性にかかわる問題なのだが、感受性そのものは世界を映し出す能力であって、それ以上でもそれ以下でもない。もしも感受性が映し出すだけに終わって、表出しないのであれば、感じ取られた世界はあくまでも個の内部にとどまり、他者に伝わることはないはずである。他者に伝わらないのであれば、われわれは共通に理解する機会を失い、これを構造化された世界観として当の個人以外の人が共有することはできない。仮に最大の効果をあげると考えても、個人の教養として個の中にとどまるにすぎない。

このような前提に立って共有されないか、これまで共有されてこなかった世界観というものを推し量ることは、およそ想像を絶することである。われわれは、のぞき見るか盗み見るかするという、公明正大な立場からすれば、ややいかがわしい態度でしか、こうした見えにくい世界観に接近できないことになる。

未知の暗闇から、われわれは一瞬にして生じ、太陽の光の中に入り、周囲を見渡し、喜び、苦しみ、われわれの存在の振動を他の存在へ伝えて、ふたたび暗闇に帰

Hosei University Repository

る。同じように、波は生じ、太陽の光を捕らえ、その動きを伝え、ふたたび海に消える。同じように、植物は土から生じ、その葉を光と空気に開き、花となり、種子となって、ふたたび土に帰る。ただ、波は何も知らない。植物は何も見ない。一人一人の人間の命は、土から出て土に帰る放射線状の曲線運動にすぎないように思われる。その短い変化の間に、宇宙を見る。恐ろしいことは、なぜこのようなことが起こるのかを誰も知らないことである。

——小泉八雲 "Some Thoughts about Ancestor-Worship" [1)]

世界と自己の認識が、なぜここにあるような形に構造化され、表出されて、他者に共有されるものになったのかを、われわれは充分に説明することはできない。あえて説明するならば、人はこれを可能にする手段を持っているからだ、ということになるだろう。ひとたび個によって得られた世界と自己の認識は、もしも他者に伝えられなければならない必要が生じたならば、通常は言語によって、おのずから一定の様態に変えられなければならない。そこに想像が働き、虚構が生まれると考えることは難しいことだろうか。しかも、描き出された世界の原像が唯一の真実であるという保証は何もないのである。

「いや、証明するに要るんだ。ぼくらからみると、ここは厚い立派な地層で、百二十万年ぐらゐ前にできたといふ証拠もいろいろあがるけれども、ぼくらとちがったやつからみてもやっぱりこんな地層に見えるかどうか、あるいは風か水やがらんとした空かに見えやしないかといふことなのだ。……」

——宮澤賢治「銀河鉄道の夜」[2)]

人は自分の目をつねに疑って生きていくことなどできない。もし疑い続けることができるとするならば、それは感受性の死を意味することにほかならないだろう。集積し、統合することのできない生というものを、われわれは当面の課題から除外しなければならないだろう。むしろ重要なことは、集積し、統合する能力は、なにか深刻な事態に陥ったときに、通常は注意の及ばない限界に触れないわけにはいかないだろうということである。注意の及ばない限界と、さらにその向こうに目を向けるのが、幻視家だけであるとはかぎらない。

Hosei University Repository

……世界の経験を構成する、いわゆる自然界の理法は全宇宙のほんの一部にすぎない。この見える世界の向こうには、いま、われわれが決定的なことは何も分からないけれども、われわれのこの世の命が成り立っていることと関係する見えない世界が広がっている。 ——William James, "Is Life Worth Living?" [3]

いわゆる創世神話と呼ばれるものを、こうした認識の壁を表現に反映しないではいられない例として考えることはできないだろうか。[4] 神話と伝説に身を任せることなく、こうした認識の壁を個が負わなければならないとなれば、生はきわめて不安定なものに感じられるであろうからである。このような認識の壁を片時も忘れないでいることに個が耐え続け、耐えぬくことは、日常生活を続けていく上で難しいだろう。不安は、あらゆる想像に道を開くかもしれないが、ただ想像し、想像する世界が広がるだけでは、人は不安から逃れることはできない。不安は個に閉じ込められたままでいるのではなくて、他と共有されなければならない。

すべての思考は、たとえ多くの私的飾りや輝きがあろうとも、社会的思考である。すべての思考は社会的必要性に応じてのみ展開できるし、社会的必要性に応じてのみ有効になりうる。 ——J.E.Boodin [5]

感受性に受け止められた世界の緊張も含めたすべての思考が、社会的共有物になるということは、なによりもまず、その人為性が大きくなるということを意味する。これは思考の社会化を意味することにほかならないのだから、社会的共有物に化けると言ってもいいかもしれない。ひとたび化けてしまえば、人為性の世界の中で、われわれはその社会的共有物を思考の対象として自由に取り扱うことができる。思考は新しい表出を生み、新しく表出されたものは、新しい思考の対象となり、ふたたび新しい表出の可能性を帯びるというように、この連鎖は無限に開かれているにちがいない。この人間特有の宇宙の再構造化が、自然を前にした人間の関心のすべてであるかもしれないのである。

Hosei University Repository

(2)

アメリカ人、F．J．ターナーの「アメリカ史におけるフロンティアの意義」("The Significance of the Frontier in American History") [6] という論文は、一つの統一体として提示される世界観と、その世界観が形成される過程を示す興味深い例の一つである。統一体として提示される世界観を、この論考をすすめるにあたって、仮に、一つの概念とするならば、一つの概念形成を示す興味深い例と言い換えることも許されるだろう。ここに言う概念という言葉で示そうとする中身は、アメリカという国、あるいはアメリカ人だからであり、この概念の形成は、現代の世界が動いている動き方に少しでも関心のある人なら誰でも、見過ごしてしまうわけにはいかないであろう性質のものだからである。[7]

この論文は、フロンティアがアメリカという国、およびアメリカ人の国民性形成に果たした役割、すなわちアメリカの形成がフロンティアに大きく負っていることを論じていることで知られている。クレーヴクール、フランクリン、トックヴィルがヨーロッパにアメリカ人像を提供したのと同じ意味で、ターナーはアメリカという国、およびアメリカ人の国民性形成過程を世界に提供した。その重要性は今も少しも変わらない。

その概要を次に見てみよう。

初めは荒野が入植者を支配する。やがて、入植者が荒野を変えていく。この動きは、地理上の理由で一様でない線を描きながら植民地時代から西に向かって進み、あとに残した場所、すなわち沿岸部（the Atlantic coasts)、東部(the East)、旧世界（the Old World）に影響を与えた。というよりは、むしろ勢力を行使した。沿岸地域からの補給線が長くなり、フロンティアが沿岸地域から遠くなるにつれて、イングランドに依存してはいられなくなる。その結果、フロンティアにおける人びとの考えと、フロンティアにおける人びとが必要とすることが、法律の制定に力を及ぼし、アメリカの独自性、すなわちアメリカという国、アメリカの国民性を生み出した。こうして生み出されてきたのは次のようなものである。

Hosei University Repository

・可動性
(mobility)
・民主的投票
(democratic suffrage)
・個人主義［反社会的傾向、支配に対する反感］
(individualism [anti-social tendency, antipathy to control])
・国家主義
(nationalism)

また、フロンティアに負っているアメリカ人の特性として、次のようなものが挙げられている。

・激しさと好奇心が結びついた態度や話し方の粗雑なことと力強さ
(coarseness and strength combined with acuteness and inquisitiveness)
・臨機応変の、実際的で独創的な心の持ち方
(practical, inventive turn of mind, quick to find expedients)
・芸術性には欠けているが大きな目的を達成するには力のある、物的事柄に対する親分的支配
(masterful grasp of material things, lacking in the artistic but powerful to effect great ends)
・無謀で神経質な行動力
(restless, nervous energy)
・良いこと悪いことに精を出す確固とした個人主義
(dominant individualism, working for good and for evil)
・楽天性、および自由と一体である豊かさ
(buoyancy and exuberance which comes with freedom)

思い当たることがあるというような性質の事柄ではないが、いずれもが一般的に否定できないようなことばかりである。

Hosei University Repository

特異に思われるのは、地理的辺境としてのフロンティアの取り扱い方である。実体としてのフロンティアが存在したことは誰も疑わないし、フロンティアが接しているか、あるいはフロンティアそのものであるはずの荒野があったことも事実のはずである。しかし、フロンティアを構成しているものが何であるか、および、フロンティアが接しているか、あるいはフロンティアそのものであるはずの荒野が何であるかについては、それほど熱心に触れられてはいない。フロンティア（frontier）という語が多く使われていることを怪しむ必要はないが、荒野（wilderness）という言葉は、わずかに数度しか使われていないのである。もちろん、フロンティアの消滅というところから論が始められているのだから、このことは、ターナーその人の問題の扱い方に責任があるというわけではない。

ターナーの関心は、フロンティアの、もっぱらこちら側にあって、フロンティアの向こうに何があるかは、まったく問題になっていない。フロンティアが前線ならば、後ろには東部があり、大西洋があり、イングランドがある。背後にある旧世界と袂を分かつことが、すなわち新しい文化を生み出すことになったという構図の中で、すべてが論じられているのである。

何もないところから何かを引き出すのは困難であるが、何かを必要に応じて誇張することは人間の社会の中ではいつでも可能であり、またつねに実践されていることでもある。誇張は論旨に応じて自由に裁量される。[8] 現実を動かしたものはフロンティアという抽象体ではなくて、現実に西に広がる土地であったはずである。フロンティアの消滅は、そのような土地がなくなったことを意味している。

「そして、アメリカの発見から4世紀、合衆国憲法のもとに生きた100年が経過した今、フロンティアは消え、それと同時にアメリカ史の第一期は閉じられた。」[9]

これは今から百年以上も前のことである。閉じられた第一期は、その後の歴史が長くなればなるほど、その隠れた意味を大きくしていくように思われる。アメリカ、およびアメリカ人という概念の辺境に見えるフロンティアという見えにくいもの、ことによると妖怪のようなものは、アメリカのその後

Hosei University Repository

の歴史の中に、そして現在も、見えにくいながらも、なお生き生きと動き、なくてはならないものとして存在し続けているのではないだろうか。アメリカ的生活の脈絡の中では、地理的辺境は宇宙空間に移り、知の辺境でも、とどまることを知らない。フロンティアがなければアメリカの国民性は成立しない。ターナーの論文から、このような結論を導き出すことは、必ずしも困難ではないように思われるのである。

（3）

ニューイングランドの作家、N．ホーソーンの作品、「年の瀬の対話」（"The Sister Years"）の冒頭に、次のような描写がある。

> 夕べの11時と12時の間のことだった。「時」の支配する帝国の国境線上に、最後の足跡を残そうとしていた「行く年」は、まだ、わずかな時間が残っていることに気がついて、所もあろうに、ぼくたちの新しい市役所の階段に腰を下ろした。[10]

擬人化に伴って小宇宙が現われる。時の帝国の向こうに何があるかは分からないけれども、国境線が引かれている。国境線の内側には、たとえ作者が想像したもの、作り上げたにすぎないものであっても、一つの世界が与えられている。その世界は言葉に表現されて、読者に見えるものになっている。

同じ作者の手になる「ヤング・グッドマン・ブラウン」（"Young Goodman Brown"）という短編小説は、植民地時代のセイレム・ヴィレッジを舞台にし、一人の人間の目を通して見た異様な世界が展開される虚構性の高い作品である。

妻に別れの挨拶をして夜の森に出かけていく主人公は、夜の森の中に、悪魔が司会する魔女の集会を目撃し、その中に誘い出されている自分の妻の姿を見る。主人公は明らかに森の中にいる。この不思議な森は、主人公の不幸な世界を映し出し、その世界を包み込む枠をなしている。その世界は通常の生活では見えないものを見えるようにしてくれる魔法の世界である。

作品の中で一定の手順が進行して立ち現われる世界は魔法的ではあっても、

Hosei University Repository

奇想の世界とは言えない。主人公の生活と、生活に反映される心理は、わけの分からない溝を一気に飛び越えてしまうようなものではなくて、ごくありふれた、読者が分かち合うことができ、また納得のいくようなものである。作品の途中から暗示されている夢も、すべての人間に備わったものであり、どうしても用事があって夕暮れ時に出かけなければならないというのは、市民生活にとって、ありえないことではない。それでもなお虚構性が高いというのはどこからくるのか、ということが問題なのである。

いくつかの情景を原文とともに引用してみたい。

「いやあ、驚いたなあ、まさかあの農婦の小母(おば)さんのグーディ・クロイスがこの夕暮れどき、こんな荒野の奥深くまででかけてくるなんて！」[11]
('A marvel, truly, that Goody Cloyse should be so far in the wilderness, at night-fall!') [12]

とすれば、これらの聖者たちは、いったい、なんのために、この異端の荒野の奥深くまで旅をしにきたというのであるか？ (78)
(Whither, then, could these holy men be journeying, so deep into the heathen wilderness? <82>)

……「フェイス！　フェイス！」と呼応したから、その音はまるで頭の錯乱した、2悩める群衆のことごとくが彼女を求めて荒野をさまよい駆けめぐっているかのように聞こえた。(79)
(...crying—'Faith! Faith!' as if bewildered wretches were seeking her, all through the wilderness. <82-83>)

道路はいまいよいよ広く、いよいよ荒涼となってゆき、いよいよ微かにしか辿れなくなり、ついに霧散した。彼は暗闇の荒野のただなかに取り残された…… (80)
(The road grew wilder and drearier, and more faintly traced, and vanished at length, leaving him in the heart of the dark wilderness...<83>)

……音節は重々しく消えていったが、その余韻は人間の声によるコーラスでではなく、夜の静寂(しじま)に閉ざされた荒野の一切の音の合唱によって、長い尾を曳くように響きわたり、遠雷のような協和音となって轟いた。(82)

Hosei University Repository

(The verse died heavily away, and was lengthened by a chorus, not of human voices, but of all the sounds of the benighted wilderness, pealing in awful harmony together. <84>)

ここには、作品の中で使われている荒野（wilderness）という表現を、煩瑣になることを承知で、ほとんどすべて引用した。荒野に加えて、砂漠（desert）という語と孤独（solitude）という語も使われている。森（woods, forest）という表現は、荒野、および荒野に相当する表現の、およそ二倍ちかく使われている。ところが、その使われ方を見ると、この森（the forest）というように、そっけない言い方になっている。これは、森は森であって森でないということ、すなわち森の実在性、場所としての森は単なる森ではないことを示していることにならないだろうか。作品はまさにそのように進行していくのである。森は脚色されて荒野に変えられ、小宇宙の枠、すなわち辺境を作っている。ちょうど、ターナーがフロンティアを概念の辺境を作るのに利用したように、作者は森を、作者の芸術的形象力によって、さいはての地に置き換え、作品が作り出す特異な緊張に、より高い効果を与えるのに役立てている。

ここに一つの分岐点が現われる。作品の舞台の背景と作品自体の中に歴史的な材料がそろいすぎているために作品が提示する作品特有の世界観が見失われるのではないか、という問題である。初期の植民とピューリタンが、強い熱意と敬虔な信仰から、荒々しい自然の中に聖書の荒野を見たのは当然であろうし、舞台が現実にセイレム魔女裁判の発祥の地であることと、作者の先祖が裁判に関与したという事実もある等々のために、作品が歴史の挿話で終わってしまうのではないかという危惧である。作品には作品独自の地方性がつきまとっているということは、ほとんど忘れられている。作品独自の地方性と作品特有の世界観とはまったく別のものである。[13]

作品は一つの完結した世界であること、緊張ある世界は辺境をもっていること、この二つのことを前提にするならば、作品の解釈が文学的であろうと歴史的であろうと、結果は同じになるにちがいない。なぜなら、このような前提に立てば、研究領域にとらわれずに対象を選ぶことができるし、[14] 歴史の挿話で終わることはないと予想されるからである。方法としての辺境から

Hosei University Repository

見える「ブラウン」の世界、世界と自己の認識の世界は、肯定的で明るいターナーの描き出した国民性とは、まったくと言っていいほど違ったものになっている。この世界は、習慣と教えによってできている世界が正義の世界ではないかもしれないという猜疑に満ちており、見えるものは見てはいけないものの一部であるということを教える小宇宙であるように思われる。

(4)

西欧列強が日本の近海に姿を現わし始めたのは、アメリカが太平洋岸内陸部に辺境の消滅を見た1890年よりも百年も前のことである。当時の日本が、これをどのように受け止めたかは、後期水戸学の代表的文献として知られる会沢正士斎（1782-1863）の『新論』に、きわめて多感に展開されている。この書は幕末の維新の志士たちに多く読まれ、尊皇攘夷運動の推進に大きな力を与えたことで知られている。明治維新から日本が進んだ歴史を考えると、おそらく、太平洋戦争、あるいは大東亜戦争の終わりまで、強い影響力をもっていたものと思われる。

> ……いまは西洋人は巨艦大船に乗り組み、瞬時に数万里を行き、駛（はし）ることつむじ風のごとく、大海も平坦な路と心得、数万里の遠方も隣国と見なしている。四海みな海であるから、備えのないところがあってはならない。前にはいわゆる天険だったものが、いまではいわゆる賊衝（ぞくしょう）（賊の通路）である。してみれば、国土を守り、辺境を安んじようとするものが、どうしてむかしの歴史を根拠として今日の形勢を論じることができよう。[15]

日本の古代では、東北地方が辺境をなしていた。「道とは治める意味であるし、国とはおそらくかぎる意味であろう。道奥の道も、それと同じような用法に属し、それは、政治外の地、国の外に置かれた奥地の意味にほかならない。……道奥が、それ自身、政治的区画を意味する道奥—国になるためには、大変な努力が必要である……。道奥ということと、国ということとは、基本的に矛盾するからである。道奥が国になるためには、道奥の意味する「道の

Hosei University Repository

奥」としての性格、政治の外・国の外という性格が、原則的に修正もしくは揚棄されて、道奥もまた政治の内なる地帯であるという風土が、新たに形成されているのでなければならぬ。すなわち、道奥での政治の建設・国づくりが進んで、道奥というのが、単なる土地の呼称にとどまらないような新しい変化が、すくなくともその主要部に生じないかぎり、そういう国呼称［道奥国］がおこり得ないのである。」[16]

人間の世界が未開の地を切り開いて成立してきたものであるとするならば、辺境は特定の地に、つねに存在してきたことになる。したがって、特定の地が辺境として意味をもつのは、「政治の内なる地帯であるという風土が、新たに形成され」るときである。

『新論』の中では、いらだちと怒りと呼んでもいいような現実世界に対する不満と断罪が綴られており、これに伴って具体的な政策上の提案がなされているが、さらに平行して、辺境に関する言及がなされるときは、しばしば外からの野蛮を表わす表現が記述の随所に立ち現われてくる。たとえば、「しかるにいま西の果ての野蛮なるものどもが、世界の末端に位置する下等の存在でありながら、四方の海をかけめぐり、諸国を蹂躙（じゅうりん）し、身のほど知らずにも、あえて尊いわが神国を凌駕せんとしている」(295)[17]、「いま外夷は不逞な野心をいだいてたえず辺境を窺っており、内には邪説の害がはびこっている」(313)、「いま外敵は民心に中心がないのにつけこみ、ひそかに辺境の人民を誘惑して暗暗裏にその心をとらえようとしている」(313)、「辺土の人民が外夷に親近するのを厳禁し、悪賢い夷狄が勝手気ままにわが人民を誘惑したり、扇動したりはできないようにした」(314)、「日に日にちぢまる退勢にいながら日に日に広げる勢いの外夷を迎え、戦いを畏れる風俗をもって百戦練磨の外敵に抵抗しようとするのは、まことに寒心にたえないことである」(320)、「いまは外夷が日に日に戦争を続け、侵略を事とし、かわるがわるに来たってはわが辺境を窺っている」(322)、「外夷は万里の海を渡って人の国を狙っているのだから、食糧は敵地から徴発せざるを得ない」(341)、「……と謀議して、わが辺境の砦（とりで）をうかがいその欲望をとげて利益を山分けしようと欲するのは、まことにはっきりした形勢である」(341)、「近年、敵はまた

Hosei University Repository

しだいに辺境の民衆に誘惑の手をのべてきた」(357)、「悪辣な敵が群をなしてわが国を窺うとしても、どうしてわが辺境に勢力をたくましくすることが可能であろうか」(373)、「彼らが辺境を窺い、民を惑わそうとしていることなど、こせこせと気にすることはいらないのである」(390) 等々である。

これらの表現そのものは字義どおりであって、なにか特別な説明をする必要はないだろう。問題は、辺境が文字どおり辺境なのかどうかということなのである。辺境の向こうに外夷を見ているし、外夷がどのようなものであるかを、その適不適はともかくとして、かなり多く論じているのである。そして、このことが政策上の提案以前の問題、あるいは世界観として、尊皇に結びついているということになる。辺境として言い表わされていることは、現状を憂い、過去を述べながら刹那的に未来の世界を希求する過程において、地理上のものから、しだいに地理上のものではないものに変化していく。これを別の言葉で言えば、一つの緊張関係としての統一体である。これを、幕藩体制の動揺と欧米列強の圧力、状況に対する武士階級の自覚が生み出した緊張関係の統一体であると表現すれば、日本の近代史が教えてくれているものと一致することになるだろう。しかし、ここで論じようとすることからすると、歴史という分野で分析されたものを過去の事実として理解してしまうと、緊張関係としての世界観が見失われるという恐れがあるような気がするのである。個にとって、いわゆる「外圧」は、時を越えてつねに存在し、ときには鼓舞し、ときには悩ますものであるということを考えれば、個が感じる緊張関係は、他者との関係においてはもっとも基本的なものだからである。

さまざまな経緯を経て緊張関係、あるいは緊張関係そのものである観念が生み出し、みずからを具現したものは、人を圧倒し、驚かす。幕末の尊皇攘夷が明治維新の動乱と武力行使の中で、どのように変化し維新以降に、どのような展開を見せたかは、よく知られた事実である。

「明治維新の志士たちの突進力が、その境遇をどれほど変えたかを理解するには、古い城下町である萩を訪れてみることが有益であろう。萩は、長いあいだ小さな町のままであった都市で、いまも過去の中に静かに生きている。近代的変化はあまり見られず、中心街の街並の一画には、かつて長州の藩都

Hosei University Repository

であり、遠く離れた江戸に対する陰謀の発祥地であった頃の面影がほとんどそのまま残されている。

「吉田松陰の有名な松下村塾は、博物館となり、当時のままの姿で保存されている。伊藤博文、山県有朋など有名な吉田門下生がかつて住んでいた家々も、若い勤王志士だった彼らが倒幕を画策した一八六〇年代とあまり変わらない姿で残されている。

「質素な松下村塾の教室で目をぎらぎらさせながら座っていた若者たちが、わずか十年後には、新しい思想と技術を求めて欧米を旅行し、幕府を倒した後に魔法使いのように近代国家を実現させ、フロック・コートに身をつつんで鉄道開通式や議会や、きらびやかな鹿鳴館の舞踏会などに出席するようになったことは、正に信じ難いことである。……」[18]

萩を訪れたことがない者にとって、ここにあるような対照が、現在もなお感じられるものなのかどうか分からないが、人心の変わりようということだけで言えば、ここに描き出された感慨は、今もなお、そして萩以外の地でも有効であるように思われる。勤王と攘夷の志士は幕末と維新当初には、藩という封建的壁を越えて、日本中に存在したはずだからである。[19] 外圧に喚起され、新しい状況に自己を置かなくてはならなくなったとき、何か新しい実体が生まれる。それは単なる守りというようなものではなくて、まったく新しい形をとった、それまでに存在しなかったようなものが生まれるという意味である。新しく生まれた何かは新しい仕方で対応する。蝦夷地の開拓、琉球処分、日朝関係の再編は、明治新政府が何よりも早く取り組まなければならなかった問題のはずである。[20]

新しい状況から生まれた日本という版図と、その版図の内側に展開された活動は、近代史、および現代史の中に生々しく記録されているので、われわれはきわめてよく整理されたものを受け取っている。それだけに、いや、むしろそのために、先に述べたターナーの説明の内容と同質のものであるかどうかを判断することは難しい。記録は現在の生活の足元まで連続しているからであり、また、その後の緊張関係としての世界観の変化が版図の内側だけのものを考えるだけでいいかどうかを分かりにくくしているからである。過

Hosei University Repository

去から材料を求めるだけであるならば、たとえば、北畠親房の『神皇正統記』や、慈円の『愚管抄』を持ち出すこともできるかもしれないが、[21] その場合でも、必要なことは、状況の違いを説明の全面に押し出すのではなくて、説明そのものに一貫性を求めることが、新しい方法として必要ではないだろうか。

（5）

おそらく、人は立つ位置によって、みなそれぞれ違う風景を見ているにちがいない。立つ位置が違うことによって同じはずの風景が違って見えるのである。歴史もまたそうである。[22] 風景は特定の歴史的背景のもとに、特有の地理的条件をもって見つめられる。おそらく、歴史上の事件を考え、より深刻に再現しようとすれば、人は疑似的現在とでも呼ぶべき時間の重なりの中で、同心円的世界の中心に立っているにちがいないのである。パノラマを見るように上空から見て理解されるものではないかもしれない。なぜなら、ちょうど人はどこかに生まれつくのと同じように、特定の場所に投げ出され、特定の条件のもとに選択を許されているにすぎないからである。[23] ここには、見る者の環境とでも呼ぶべき視点が存在する。問題はそこに生まれる観念や概念である。

ここで言う観念や概念は、いわゆる観念や概念一般を意味するのではなくて、われわれが日常生活の中で何気なく使い、知識一般を取り扱うときでも、それとなく頭には思い描くものの、実体という点ではまったく曖昧に、しかも曖昧であることに気がつかないまま用いている文化的なものに対する呼称である。個人に当てはめれば教養（culture）ともなる文化的なものとは何かと問うと、ほとんど定義ができないという実情があることに、われわれはしばしば気づかざるをえなくなっている。

個人の教養と社会の文化に等しく通用する未知の概念は、個人に比重をおけば文学になり、社会に比重をおけば政治、経済、法律といった、もっぱら個人を規制し、強制する機構に分かれるということでも分裂する。同じ問題

Hosei University Repository

に取り組んでいる研究者の次の言葉が、このような悩める現在の状況をよく物語っているように思われる。「文化はもはや単に文学作品や芸術作品を表す言葉ではない。」[24)]

目的は同じでありながら、この小論では逆に、文芸作品は文化、あるいは文化情報になりうるかという問題から出発した。作品は一人歩きする。作品はいったん作り出されれば、歴史であれ、文学であれ、思想であれ、活動体として生きると考えれば、答えは肯定である。文芸作品は一つの例であるにすぎない。20世紀という近い過去には、巨大で、しかも大量の研究材料が横たわっている。われわれを魅了するのは、なにも新しく作り出される目新しいものばかりではない。

Hosei University Repository

注

1) Out of unknown darkness we rise a moment into sunlight, look about us, rejoice and suffer, pass on the vibration of our being to other beings, and fall back again into darkness. So a wave rises, catches the light, transmits its motion, and sinks back into sea. So a plant ascends from clay, unfolds its leaves to light and air, flowers, seeds, and becomes clay again. Only, the wave has no knowledge; the plant has no perceptions. Each human life seems no more than a parabolic curve of motion out of earth and back to earth; but in that brief interval of change it perceives the universe. The awfulness of the phenomenon is that nobody knows anything about it.——The Hearn Centennial Committee, ed., *Selected Writings of Lafcadio Hearn* (Tokyo: Kenkyusha Ltd.,1953), p.198.

2) 『北原白秋 高村光太郎 宮澤賢治集』(筑摩現代文学大系 14)、筑摩書房、1979年、403頁。「……数学は、一つではなく、多数なのである」——O. シュペングラー著、村松正俊訳『西洋の没落 第一巻』五月書房、昭和46年、71頁。

3) ...the so-called order of nature, which constitutes this world's experience, is only one portion of the total universe, and (that) there stretches beyond this visible world an unseen world of which we now know nothing positive, but in its relation to which the true significance of our present mundane life consists.——William James, *Writings 1878-1899* (New York: Library Classics of the United States, Inc.,1992), p.495.

4) 「宇宙の外側にあるものの探求は人間に無縁なものであり、それを解明することは人間精神の理解力を越えているのだ」——中野定雄、中野里美、中野美代訳『プリニウスの博物誌 第Ⅰ巻』雄山閣出版、昭和61年、74頁。「そもそも遠い昔のこと、造化の気が次第に凝(こ)りかたまっても、いまだに外に現われて来るにはいたらず、従って名前もなければ、動きもない、誰もその形を知らないというそもそもの宇宙の初めに、天と地とが分れ、……」「昔、天と地とがまだ分れず、陰と陽ともまだ分れていなかった頃、混沌(こんとん)としていること鶏の卵のようで、わずかにそこに、ぼんやりと、物の生れるきざしのようなものが潜んでいた。そのうちの、澄んで明かなものは、薄く広がって天となり、重くて濁ったものは、集まって地となった」——福永武彦訳『古事記・日本書紀』(日本古典文庫 1)、昭和51年、7、195頁。

5) ...All thinking, however many private frills and corr [sic] uscations it may have, is social thinking. It can develop only, and become valid only, in response to social needs.——John Elof Boodin, *Truth and Reality: An Introduction to the Theory of Knowledge*, John R. Shook, ed., Early Defenders of Pragmatism Vol. 2 (Bristol, England: Thoemmes Press, 2001), p.277. ソシュールが言語活動全体からラングを鋭く区別するのは社会性である。「(連合能力とは別の、系統化能力) の役割をよく理解するためには、言

Hosei University Repository

語活動の胚芽にすぎない、個人的な行為から抜けだす必要がある。そして社会的事実に近づくことである」――トゥリオ・デ・マウロ著、山内貴美夫訳『「ソシュール一般言語学講義」校注』而立書房、1976年、24頁。

6) Frederick Jackson Turner, *The Frontier in American History* (New York: Holt, Rinehart and Winston, Inc.,1962), pp.1-38. 初版は1920年。第1章は "The Significance of the Frontier in American History" と題され、1893年に発表されたという注がついている。

7) 歴史でありながら歴史にとどまらないターナーの論文には二重の意味がある。フロンティアを辺境と同義に考えるならば、ターナーは地理上の辺境を材料に使い、その結果としてアメリカおよびアメリカ人という概念を導き出したが、こうして提示されたアメリカおよびアメリカ人という概念につきまとう辺境をも示唆した。論文の冒頭と最後の部分にフロンティアの消滅が言及されていることが、この二重の意味をよく物語っている。識者の多くがターナーに呪縛されるのも、ここに起因している。

8) フロンティアを定義するターナーの用語法が、きわめて文学的であるという指摘がある。次の書を参照されたい。岡田泰男『フロンティアと開拓者――アメリカ西漸運動の研究――』東京大学出版会、1994年、37頁。

9) And now, four centuries from the discovery of America, at the end of a hundred years of life under the Constitution, the frontier has gone, and with its going has closed the first period of American history.――Turner, p.38.

10) Last night, between eleven and twelve o'clock, when the Old Year was leaving her final foot-prints on the borders of Time's empire, she found herself in possession of a few spare moments, and sat down— of all places in the world—on the steps of our new City Hall. ――Nathaniel Hawthorne, *Twice-Told Tales* (The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne Vol. IX), Ohio State University Press, 1974, p.334.

11) 次の書の訳文を引用させていただいた。数字は頁数を示す。坂下昇編訳『ホーソーン短篇小説集』(岩波文庫)、1994年、71頁。以後の引用には頁数のみを記す。

12) 定本には次の書を使った。Nathaniel Hawthorne. *Mosses from an Old Manse* (The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne Vol. X), Ohio State University Press, 1974, p.78. 以後の引用には頁数のみを記す。

13) 文学のもつ「地方性」については、拙稿を参照されたい。「"Young Goodman Brown" の地方性」(『PHOEBUS』第7号、法政英語英米文学研究会、平成16年、5-16頁)

14) ロビンソン・クルーソーの中に、ひたすら「経済人」としてのロビンソン・クルーソーを見つけようとすることが一つの例になるかもしれない。次の書の訳者の解説を参照してほしい。平井正穂訳『ロビンソン・クルーソー (下)』(岩波文庫)、1997年、408頁。

Hosei University Repository

15) 橋川文三編『藤田東湖』(日本の名著 29)、中央公論社、昭和49年、332頁。「辺境」はさまざまな言葉で表現されているので、次に原文を掲げておく。「今、西夷は巨艦大舶に駕し、電奔すること数万里、駛すること風颷のごとく、大洋を視て坦路となし、数万里の外も直ちに隣境となす。四面皆海なれば、すなはち備へざるところなし。尚に所謂天険なりしものは、すなはち今の所謂賊衝なり。しかるに疆を保ち辺を安んずるもの、豈に疇昔の跡を執りて、以て今日の勢を論ずるを得んや」——今井宇三郎、瀬谷義彦、尾藤正英校注『水戸学』(日本思想大系 53)、岩波書店、1973年、90-91頁。

16) 高橋富雄『高橋富雄東北学論集 地方からの日本学(第1部第2集 みちのく未知の奥)』歴史春秋出版、2003年、27頁。

17) 前掲、橋川文三編『藤田東湖』からの引用。頁数を数字で示した。「野蛮なるもの」と「辺境」は、さまざまに表現されているので、ここでもまた前掲書からの原文と頁数を掲げておく。「しかるに今、西荒の蛮夷、脛足の賤を以て、四海に奔走し、諸国を蹂躙し、眇視跛履、敢えて上国を凌駕せんと浴す」(50)、「今、夷虜は禍心を包蔵し、日に辺陲を窺伺して、邪説の害は内に稔り、百端の窮りなきことかくのごとし」(69)、「今、虜は民心の主なきに乗じ、陰かに辺民を誘ひ、暗にこれが心を移さんとす」(69)、「厳に辺民の接済を禁じて、黠虜をして肆に吾が民を煽惑するを得しめず」(69)、「日に蹙まるの勢に処りて、日に辟くの虜を待ち、戦いを畏るるの俗を用ゐて、以て百戦の寇に抗せんと、いづくんぞ寒心せざるを得んや」(77)、「今や外夷、日に干戈を尋ぎ、呑併を事とし、遥に出て並び至りて、以て人の辺境を窺ふ」(80)、「虜は航海万里にして、人の国家を伺へば、糧を敵に因らざるを得ず」(100)、「……と謀を合せて我が辺徼を伺ひ、与にその欲を済しその利を分たんと欲するも、また勢の見るべきものなり」(101)、「……近時に至りて、虜また漸く潜かに辺氓を誘ふ」(120)、「黠虜をして千群して我を窺はしむといへども、将た何を以て我が辺陲に陸梁するを得しめんや」(139)、「また何ぞ屑屑乎としてその辺を伺ひ民を誘ふをこれ患へんや」(156)

18) フランク・ギブニー「文化革命としての明治維新」(田中彰編『幕末維新論集 1 世界の中の明治維新』吉川弘文館、2002年、298頁)

19) 「……当時政府内外に、旧来の尊攘的立場に立つ人々は広汎に存在しており、もし政府が彼等を激昂させ政府が彼等全体と決定的に対立してしまえば、政府は深刻な窮地におちいらざるを得なかったであろう……」——下山三郎『近代天皇制研究序説』岩波書店、2001年、82頁。

20) 蝦夷地の開拓と琉球処分については、次の書を参照されたい。桑原真人、我部政男編『幕末維新論集 9 蝦夷地と琉球』吉川弘文館、2001年。日朝関係の再編については、次の論文を参照されたい。諸洪一「明治初期日朝関係の再編と対馬」(横山伊徳編

Hosei University Repository

『幕末維新論集7 幕末維新と外交』吉川弘文館、2001年、217-242頁）

21）「大日本は神国である」に始まる『神皇正統記』は、著者の北畠親房が自ら説明しているように、神秘である神の道をしるし、皇統が正理によって神代から受け継がれているいわれを述べることを目的としている。日本という言葉で喚起されるものが歴史的であろうと、地理的であろうと、一つの統一体として提示されているのである。あまりにも豪華絢爛とした光景が映し出されるので、しばし忘れてしまいがちであるが、目の前に現われているものは一つの観念体である。それは一つの世界を構成している。慈円の『愚管抄』もまた、「道理」を多用しながら、怨霊、悪魔、天狗の出没する観念の統一体をなしている。「道理」を理解することは難しいが、共有しやすいように感じられるのは、現在の日本が天皇を持っていることからくるのかもしれない。なお、『神皇正統記』と『愚管抄』については、次の書を参照されたい。永原慶二編『慈円・北畠親房』（日本の名著9）、中央公論社、昭和46年。

22）「自然とは形態である。その中で高度文化の人間が自分の感覚の直接印象に、統一と意味とを与えるところの形態である。歴史もまた形態である」――シュペングラー、前掲書、18頁。

23）内観としての自我と社会および人間行動の関係について、この小論が取り扱う辺境概念にとって啓発的なG.H.Meadの次の論文を参照されたい。「アメリカ社会思想へのクーリーの貢献」（加藤一己、宝月誠編訳『G.H.ミード　プラグマティズムの展開』ミネルヴァ書房、2003年、187-208頁）　次の発言は特定の場所にある特定の条件下における能動的な世界観を提示している。「……生れによって決まる社会的な相違というものがもはやまったく存在しない真の大衆社会などは、まだわれわれは見ていない。なぜなら西洋文明のなかではそれに一番近いアメリカ合衆国においてすら、どの国の出身であるかということによる相違は、経済的、また職業的な意味は絶えず失われて行くにしても、社会的には依然としてきわめて重要な役割を演じているからである」――ハナ・アーレント著、大久保和郎訳『全体主義の起原1』みすず書房、1972年、103頁。

24）島根國士、寺田元一編『国際文化学への招待――衝突する文化、共生する文化』新評論、1999年、6頁。